

角 ヶ 谷 城 跡

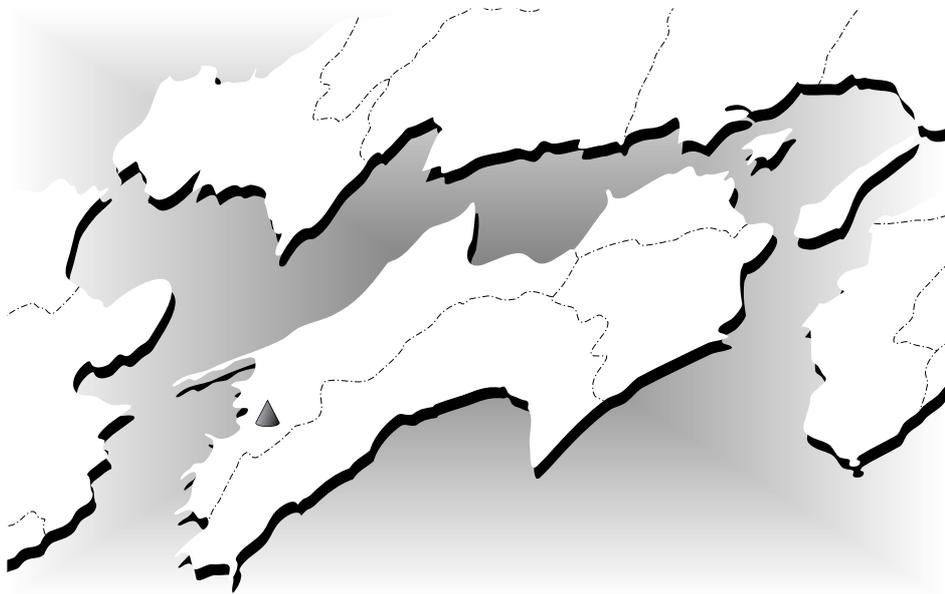
— 県道宇和三間線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2006.3

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

角ヶ谷城跡

—県道宇和三間線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書—



2006.3

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター



上空から見た遺跡周辺(南西より)



土層堆積状況(西より)

例 言

- 1 本報告書は、愛媛県宇和島市三間町務田に所在する^{かくがたにじょうあと}角ヶ谷城跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および報告書の作成は、県道宇和三間線の整備に伴い、愛媛県宇和島地方局の委託を受け、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成18年2月6日から同2月20日の間に実施し、整理作業および報告書の作成は同2月21日から3月25日にかけて実施した。
- 4 発掘調査および報告書の作成は、次の職員が担当した。
派遣調査員 片岡大介
嘱託員 藤本清志
- 5 発掘調査および報告書作成において、下記の職員および作業員の協力を得た。
職 員
中野良一 多田 仁 三好裕之 郷田秀和 山中孝重 寺嶋信三
現場作業員(50音順)
泉野哲夫 富永隆記 兵頭 清
- 6 発掘調査および報告書作成では、多くの方々のご指導・ご助言をいただきました。記して謝意を表します。(50音順・敬称略)
井関副子 稲垣和子 中島弘二 広瀬岳志 日和佐宣正 薬師寺孝男
安岡賢司
- 7 発掘調査時の基準点・水準点打設は有限会社赤岡測量設計事務所に、角ヶ谷城跡およびその周辺の航空写真撮影は九州航空株式会社に委託した。
- 8 本報告書の執筆・編集は片岡・藤本が分担して行った。

凡 例

- 1 遺構図の方位は世界座標に基づく真北を示し、標高は海拔高度を表す。
- 2 土層・遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』(2001年前期版)に拠る。
- 3 遺物観察表において、胎土中に含まれる鉱物の観察を以下の基準で行った。
石英・長石・雲母・赤色粒については、肉眼観察で判別した。それ以外はその他とした。
記載事項は、鉱物の大きさ(L=3mm以上、M=1mm以上3mm未満、S=1mm未満)と鉱物の混入量(微=1cm²に微量に認められるもの、少=1cm²に散在するもの、多=1cm²に多く認められるもの)とし、記号の組み合わせで表現した。
- 4 遺物写真の縮率はS=1/3である。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
1 確認調査.....(藤本).....	1
2 調査の体制.....(藤本).....	1
3 調査の経過.....(片岡・藤本).....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....(藤本).....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
1 縄文時代	3
2 弥生時代	4
3 古墳時代	4
4 古代	4
5 中世	4
第3章 調査成果.....	9
第1節 調査区の設定.....(片岡).....	9
第2節 基本層序.....(片岡).....	10
第3節 遺構と遺物.....(片岡・藤本).....	13
1 遺構	13
2 遺物	14
第4章 まとめ.....(藤本).....	15

図目次

図1 角ヶ谷城跡縄張り図	2
図2 周辺の遺跡分布	6
図3 調査区的位置	8

図4	調査前の地形	9
図5	基本層序	11
図6	遺構配置および調査後の地形	13
図7	遺物	14
図8	郭構築模式図	15

表 目 次

表1	周辺の遺跡一覧	7
表2	遺物観察表	14

図 版 目 次

巻頭図版	上:上空から見た遺跡周辺(南西より)／下:土層堆積状況(西より)
図版1	上左:遺跡遠景(北より)／上右:三間盆地をのぞむ(南より) 中左:萩森城跡をのぞむ(東より)／中右:調査前の調査区 遠景(北より) 下左:調査前の調査区 近景(北東より)／下右:調査前の調査区 近景(南東より)
図版2	上左:基本層序1／上右:基本層序2 中左:基本層序3／中右:基本層序4 下左:基本層序5／下右:基本層序6
図版3	上左:基本層序7／上右:基本層序8 中左:遺物出土状況 近景(西より)／中右:調査区完掘状況 遠景(北より) 下左:調査区完掘状況 遠景(西より)／下右:調査区完掘状況 近景(北東より)
図版4	上左:調査区完掘状況 近景(北東より)／上右:調査区完掘状況 近景(南東より) 中左:調査区完掘状況 近景(南西より)／中右:測量風景 下:遺物(左:スクレイパー表／中:スクレイパー裏／右:備前焼)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯と経過

1 確認調査

愛媛県は県道宇和三間線整備工事に伴い、宇和島市三間町(平成17年8月1日、旧北宇和郡三間町は宇和島市と合併)務田の同予定地の一部に遺跡が存在するとの地元住民からの情報を受け、愛媛県教育委員会(以下「県教委」)・宇和島市教育委員会(以下「市教委」)が当該地およびその周辺を踏査したところ、予定地内の丘陵尾根部に郭を確認するとともに、周辺で中世の遺物を表面採集した。また、予定地の丘陵は古くから「城跡」と呼ばれており、遺跡の可能性が高いことが判明した。そこで県教委が市教委の協力のもと、平成17年11月に同予定地の埋蔵文化財の有無等について試掘調査を実施し、縄張り図を作成した。その結果、同予定地内の約150m²の範囲で遺跡の存在が確認された(図1)。

2 調査の体制

理事長	野本俊二
常務理事	日野孝雄
総務課長	真山 勉
調査課長	岡田敏彦
調査第二係長	眞鍋昭文
派遣調査員	片岡大介
嘱託員	藤本清志

3 調査の経過

試掘調査の結果により、工事に先立って記録保存のための埋蔵文化財調査が必要となったことから、愛媛県と県教委および財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下「県埋文センター」)が協議を行い、平成18年1月に愛媛県宇和島地方局の委託を受けて県埋文センターが発掘調査を実施することになった。

平成18年1月27日から調査準備を行い、現地での発掘調査は2月6日に着手した。まず調査区の周囲にネットを設置し、現場安全対策を施した。表土除去を実施する前に、現地形を把握するための地形測量を行い、また、調査区中央にトレンチを掘削して土層の堆積状況を確認した。

その後、県教委の試掘結果とトレンチの土層確認の結果を参考に、機械力・人力を用いて遺構面の直上まで表土層を除去し、遺構・遺物の検出に努めた。それらの作業と並行して平・断面図の測量および写真撮影などの観察・記録を実施した。平面図は縮尺1/100で作成し、断面図は1/20で作成した。

測量は、基準点(WGS84系測地成果2000)を調査区周辺に打設してこれを用い、光波測距儀によ

って行った。

現地における発掘調査は2月20日に終了し、その後2月21日から整理作業および報告書作成を実施した。

発掘調査で得られた遺構の図画や写真類の資料については、県埋文センターが保管・管理している。なお、遺構写真はデジタル化(photoCD)して原盤とともに保存している。

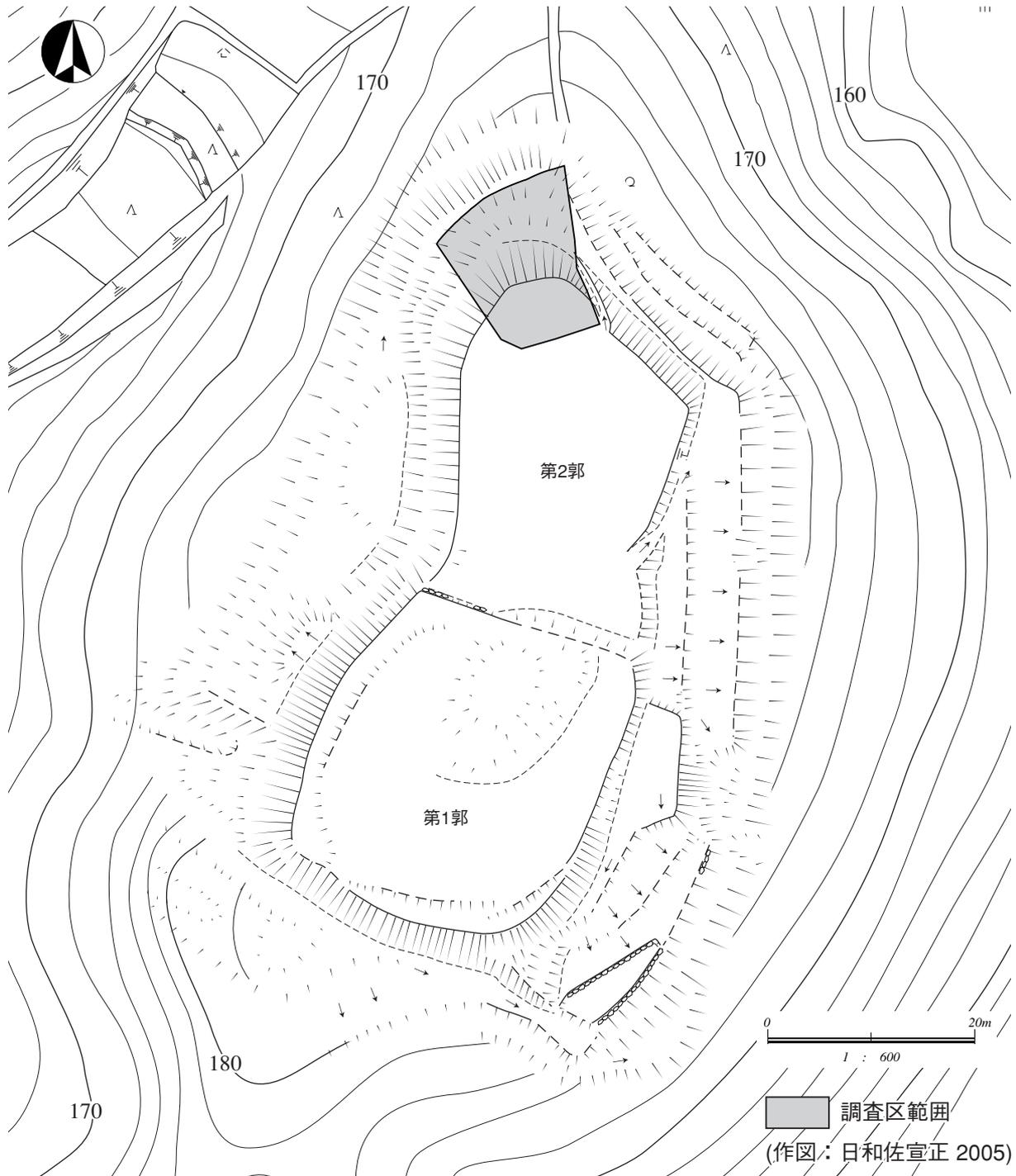


図1 角ヶ谷城跡縄張り図

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

宇和島市三間町は愛媛県南部に位置し、北部を東西に展開する法華津山脈(標高約500～900m)や、南西部の泉ヶ森・楨ノ山山地(標高約600～700m)などの山地に囲まれている(芳我1974)。四万十川水系の三間川・広見川・吉野川等により、周囲に低湿地および低位の段丘が形成され、この低湿地・低位段丘は鬼北盆地と地理区分されている。三間川によって形成された盆地は、鬼北盆地の小区分として三間盆地と呼ばれている。角ヶ谷城跡はこの三間盆地の南部に発達した泉ヶ森・楨ノ山山地から伸びる標高約185mの小起伏丘陵に位置する。

地質的には四国を横断する仏像構造線南側の四万十帯が大部分を占め、これらは下大野層・法華津層・吉田層・小倉層・三間層・光満層・寄松層などを形成し、今回調査の行われた務田一帯は、光満層に属する砂岩層が基盤となっている(三間町誌編纂委員会1994)。この光満層は三間町の南側に分布するもので、大部分が高位の山間部となっている。また土壌区分上からみると、三間盆地一帯に黄色・灰色系の沖積低地堆積物が発達し、角ヶ谷城跡の丘陵部は和霊統と呼ばれる褐色森林土壌が堆積している(清水・藤本1974)。

第2節 歴史的環境(図2・表1)

宇和島市三間町の埋蔵文化財調査は、1987年に開始された旧三間町による遺跡詳細分布調査がその契機となる。この調査は3年間継続され、その詳細は4冊の報告書と町誌にまとめられている(三間町遺跡詳細分布調査団1987ほか、三間町誌編纂委員会1994)。その後、本調査地(1)から北へ約100mの務田遺跡(32)において、県埋文センターと三間町教育委員会によって発掘調査が実施され(多田・中島2004、井関・中島2005)、南東約300mの正徳ヶ森城跡(34)においても県埋文センターによる調査が行われている(片岡・藤本2005)。ここでは時代ごとにその概要を振り返るが、旧石器時代については未発見である。今後の調査事例に期待したい。

1 縄文時代

縄文時代の前半期までの遺跡には、^{かなどういせき}金銅遺跡・馬根遺跡(31)・中山池遺跡(8)などが挙げられる。金銅遺跡ではチャート製の石鏃が確認されており、石材利用や石鏃の形態から縄文時代早期の所産と位置づけられている(三間町遺跡詳細分布調査団1987)。馬根遺跡では、サヌカイトやチャートを石材とした石鏃・尖頭状石器・石核などが確認され、石材利用や石器の形態などから縄文時代早期から後期までの時間幅で理解されている(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。中山池遺跡周辺では、縄文時代前期に所属すると思われる姫島産黒曜石製の石鏃や中期の船元式土器なども採集されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990a)。

縄文時代後半期の遺跡には、三間高校校庭遺跡(38)が知られている。三間高校校庭遺跡は、1987年に旧三間町による遺跡踏査で発見された遺跡である。1988年に愛媛大学考古学研究室によって発掘調査が行われ、縄文時代の遺物包含層から縄文時代晩期の刻目突帯文土器が出土している(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。また、土居中地区で採集された独鈷石は頁岩製のもので、後期から晩期の所産とされている。その他に、宮野下地区の板山地でも石鏃などの採集例が報告されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。

2 弥生時代

弥生時代の遺跡には、新田神社裏山や三間小学校付近が挙げられる。新田神社裏山では弥生土器の壺が確認されているが、これは壺棺として利用されたことが考えられている(三間町誌編纂委員会1994)。また、三間小学校付近では石庖丁が確認されている(三間町誌編纂委員会1994)。

3 古墳時代

古墳時代の遺跡として春日古墳(24)・西谷古墳・一ノ森古墳が確認されている。春日古墳は直径約11mの円墳で、箱式石棺が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。西谷古墳は主体部の確認がなされていないが、直径9.4mの円墳であるとされている(三間町遺跡詳細分布調査団1990b)。また、一ノ森城跡の中腹で確認された一ノ森古墳では、周辺で円筒埴輪片が採集されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990a)。須恵器の年代から、7世紀末から8世紀初頭であると考えられている。墳丘形態は不明である。

4 古代

務田遺跡第1次調査において、8世紀と思われる須恵器の短頸壺が出土している(多田・中島2004)。

5 中世

宮野下地区の板山地において、旧三間町が行った試掘調査によって柱穴群が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。また同じ頃に行われた愛媛大学考古学研究室の調査でも、中世段階の柱穴7基が確認されている(三間町遺跡詳細分布調査団1988)。務田遺跡第1次調査では建造物2棟、柱穴44基が確認され、土師器杯や土師質の鉢、土鍋の破片が出土している。建造物に伴う遺物が皆無であるため、時期認定については問題が残るが、建造物の柱間距離から中世段階に比定できると報告されている(多田・中島2004)。三間町教育委員会の第2次調査においても、中世段階の建造物が確認された(井関・中島2005)。正徳ヶ森城跡では、調査箇所では中世城館跡に関する遺構・遺物の出土がなかったものの、単郭構造の砦や狼煙台の機能が想定されている(片岡・藤本2005)。また本調査地の東にある富ヶ谷池では、1955年の堤防工事中に10,211枚の銅銭が納められた備前焼の壺が発見されている(三間町遺跡詳細分布調査団1987、立川1988)。

この他には発掘例は無いが、中世城館跡の縄張り調査によって、新城跡(57)(土居中)、西城跡

(47)・中城跡(49)・下城跡(50)(迫目)、大森城跡(44)(宮野下)、告森城跡・井関城跡・一ノ森城跡・高森城跡・岡本城跡など、多くの成果が公表されている(愛媛県教育委員会編1987、三間町遺跡詳細分布調査団1988・1990a)。これらの事例以外にも、中野集会所裏、新田神社、中山池F・G・H地点で、土師器や羽釜などの中世土器が採集されている(三間町遺跡詳細分布調査団1990a・1990b)。

参考文献

- 芳我幸正1974「I地形分類図」『土地分類基本調査 宇和島』愛媛県
- 清水 敬・藤本義則1974「III土壌図」『土地分類基本調査 宇和島』愛媛県
- 日本の地質『四国地方』編集委員会編1991『日本の地質8 四国地方』
- 愛媛県高等学校教育研究会地理歴史・公民部会地理部門編1999『鬼北盆地の風土と人々のくらしー三間町・広見町・松野町ー』
- 愛媛県教育委員会編1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1987『三間町成妙地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1988『三間町三間地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1990a『三間町二名地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 三間町遺跡詳細分布調査団1990b『三間町詳細分布調査報告書』
- 三間町誌編纂委員会1994『三間町誌』
- 立川増吉1988『伊豫の発掘古銭』
- 多田 仁・中島義人2004『務田遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 井関副子・中島弘二2005『務田遺跡-第2次調査-』三間町教育委員会
- 片岡大介・藤本清志2005『正徳ヶ森城跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	ふりがな	種類	時代	遺構・遺物	文献
1	角ヶ谷城跡	かくがたにじょうあと	城館跡	中世	郭・竪堀・中世土器	文献13
2	正地遺跡	しょうちいせき	散布地	縄文・中世	縄文土器・中世石器	文献2・3
3	ウワグチ遺跡	うわぐちいせき	散布地	縄文・中世	縄文土器・中世土器	文献2・3
4	ムカイノオク遺跡	むかいのおくいせき	散布地	弥生	弥生土器	文献2・3
5	ムカイノオク下遺跡	むかいのおくしもいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
6	御墓遺跡	おほかいせき	散布地	弥生	弥生土器	文献2・3
7	トウボク遺跡	とうぼくいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
8	中山池遺跡	なかやまいけいせき	集落跡	縄文～弥生	建物跡・縄文土器 弥生土器・石器	文献2・3・10～12
9	太宰遺跡	だざいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
10	竹中奥遺跡	たけなかおくいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
11	黒井地城跡	くろいちじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁	文献2・3・8
12	源蔵遺跡	げんぞういせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
13	西谷遺跡	にしたにいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
14	広がり谷遺跡	ひろがりたにいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
15	金山城跡	かなやまじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・堀切・土塁	文献1～3・8
16	朝谷遺跡	あさたにいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
17	成妙小学校南遺跡	なるたえしょうがっこうみなみいせき	散布地	縄文・弥生	石器・弥生土器	文献2・3・8
18	岩倉城跡	いわくらじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁・巨石	文献1～3・8
19	宗光遺跡	むねみついせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
20	丸山遺跡	まるやまいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
21	仏崎遺跡	ほとけざきいせき	散布地	弥生	弥生土器	文献2・3
22	沢近城跡	さわちかじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁・堀切	文献1～3・8
23	庄屋遺跡	しょうやいせき	散布地	弥生	弥生土器	文献2・3
24	春日古墳	かすがこふん	古墳	古墳	箱式石棺	文献2・3・11
25	盲谷遺跡	めくらたにいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
26	鳥屋が森城跡	とりやがもりじょうあと	城館跡	安土桃山	腰郭・蛸壺	文献1～3
27	霊法遺跡	れいほういせき	散布地	縄文	縄文土器	文献2・3
28	萩森城跡	はぎもりじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁・竪堀	文献1～3・8
29	内田西遺跡	うちだにしいせき	散布地	弥生・中世	弥生土器	文献2・3
30	茶臼の森城跡	ちゃうすのもりじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・堀切	文献2・3・8
31	馬根遺跡	うまねいせき	散布地	縄文	石器	文献2・3・9・12
32	務田遺跡	むでんいせき	集落跡	中世・近世	建造物・柱穴 弥生土器・陶磁器	文献4・5・6
33	窓峠遺跡	まどとうげいせき	散布地	中世	郭・土塁	文献2・3
34	正徳ヶ森城跡	しょうとくがもりじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・竪堀	文献1～3・7・8・12
35	アンチモニの穴跡	あんちもにのあなあと	生産遺跡	明治	窯跡	文献2・3
36	森山遺跡	もりやまいせき	散布地	弥生	弥生土器	文献2・3
37	雨乞城跡	あまごいじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁・竪堀	文献1～3・8
38	三間高校校庭遺跡	みまこうこうていせいせき	散布地	縄文	土器(個人)・石棺	文献2・3・9・12
39	宮の下遺跡	みやのしたいせき	散布地	?	石器	文献2・3
40	三島神社遺跡	みしまじんじやいせき	散布地	縄文～中世	縄文土器・弥生土器 中世土器	文献2・3
41	渡辺遺跡	わたなべいせき	散布地	古墳・中世	中世土器	文献2・3
42	板山地遺跡	いたやまちいせき	散布地	縄文～中世	縄文土器・弥生土器 中世土器	文献2・3
43	板山地柱穴跡	いたやまちはしらあなあと	城館跡	安土桃山	土坑墓・柱穴・石器	文献2・3・9
44	大森城跡	おおもりじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・腰石垣・土塁 竪堀	文献1～3・9
45	松峰城跡	まつみねじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・土塁・石塁	文献1～3・9
46	野添池遺跡	のぞえいけいせき	散布地	弥生・古墳・中世	弥生土器	文献2・3
47	西城跡	にしじょうあと	城館跡	安土桃山	郭	文献1～3・9
48	岡本遺跡	おかもといせき	散布地	古墳	土器	文献2・3
49	中城跡	なかじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・堀切・土塁	文献1～3・9
50	下城跡	しもじょうあと	城館跡	安土桃山	郭・堀切	文献1～3・9
51	赤松遺跡	あかまついせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
52	松本遺跡	まつもといせき	散布地	縄文～中世	縄文土器・中世土器	文献2・3
53	東県道下遺跡	ひがしけんどうしたいせき	散布地	縄文・弥生・古墳	縄文土器・弥生土器	文献2・3
54	三間焼窯跡 (土居中窯跡)	みまやきかまあと (どいなかかまあと)	生産遺跡	明治	窯跡	文献2・3
55	土居清良廟	どいせいりょうびょう	石造物	江戸	五輪塔	文献2・3
56	妙覚寺遺跡	みょうかくじいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3
57	新城跡	しんじょうあと	城館跡	安土桃山	郭	文献1～3・9
58	土居中遺跡	どいなかいせき	散布地	弥生	土器(個人)・弥生土器	文献2・3
59	生鳥遺跡	いくしまいせき	散布地	縄文	中世土器	文献2・3
60	妙見神社遺跡	みょうけんじんじやいせき	散布地	中世	中世土器	文献2・3

文献一覧(表1関連)

- 1 愛媛県教育委員会編1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』
- 2 愛媛県教育委員会編2000『愛媛県埋蔵文化財包蔵地一覧表』
- 3 愛媛県教育委員会編2000『愛媛県埋蔵文化財包蔵地分布図』
- 4 柴田昌兎編2005『愛比売-平成16年度年報-』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 5 多田 仁・中島義人2004『務田遺跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 6 井関副子・中島弘二2005『務田遺跡-第2次調査-』三間町教育委員会
- 7 片岡大介・藤本清志2005『正徳ヶ森城跡』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 8 三間町遺跡詳細分布調査団1987『三間町成妙地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 9 三間町遺跡詳細分布調査団1988『三間町三間地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 10 三間町遺跡詳細分布調査団1990a『三間町二名地区遺跡詳細分布調査報告書』
- 11 三間町遺跡詳細分布調査団1990b『三間町詳細分布調査報告書』
- 12 三間町誌編纂委員会1994『三間町誌』
- 13 葉師寺孝男2004『城の中世 縄張図説・西部四国を中心にして』

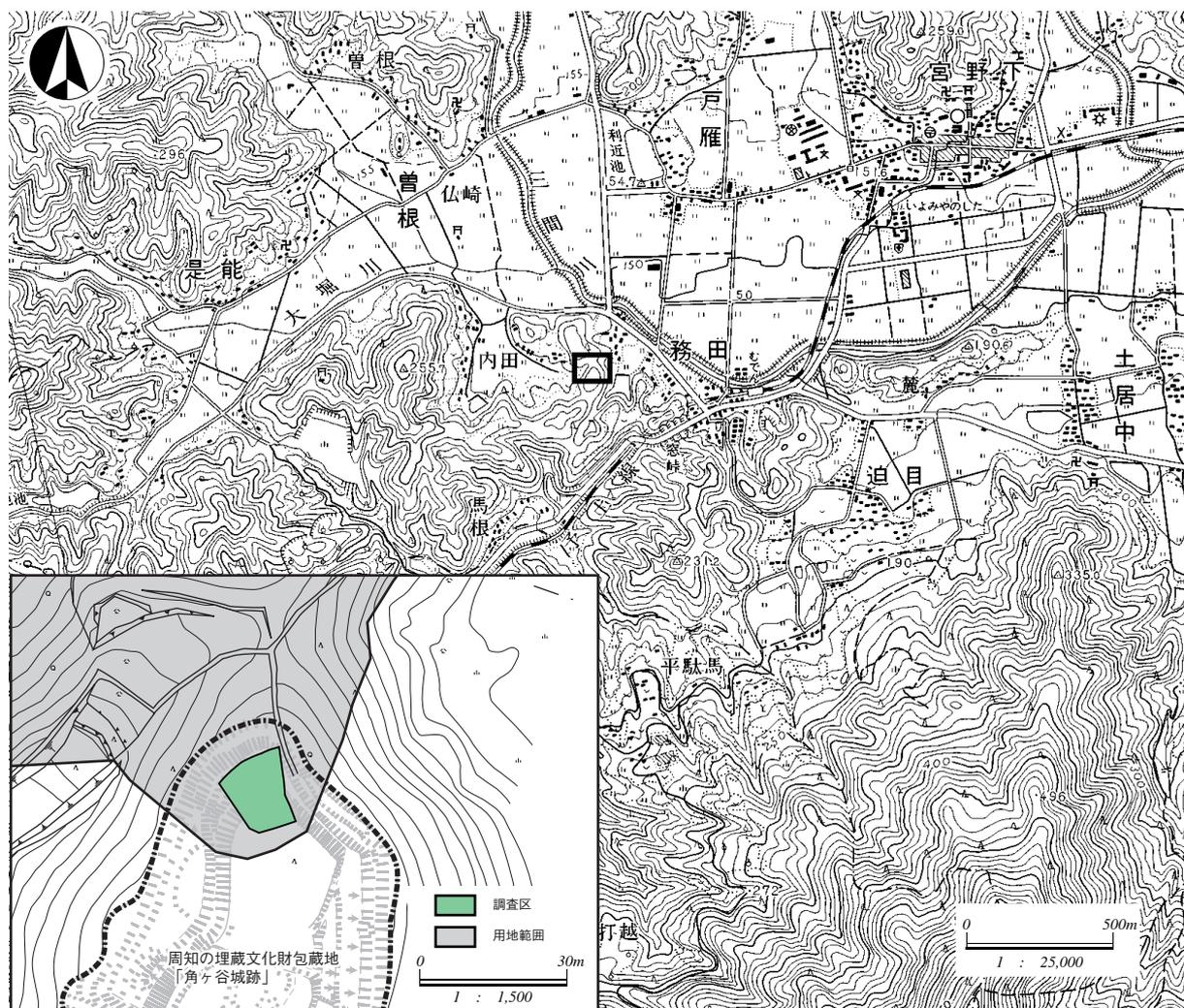


図3 調査区の位置

第3章 調査成果

第1節 調査区の設定

調査区の絶対位置は、北緯33°16'49"、東経132°38'50"の交差する付近で、標高は約178～184mを測る。行政上は宇和島市三間町務田866番2で、周知の埋蔵文化財包蔵地「角ヶ谷城跡」の北端にあたる場所に位置している(図3)。県教委が作成した縄張り図によると、本調査区の範囲内においては南部分に郭とみられる平坦部が、中央には切岸とみられる斜面が含まれており、それは表土除去前の地形測量によって改めて確認することができた(図4)。

調査区は南北約15m、東西約10m、平面積は約150m²である。

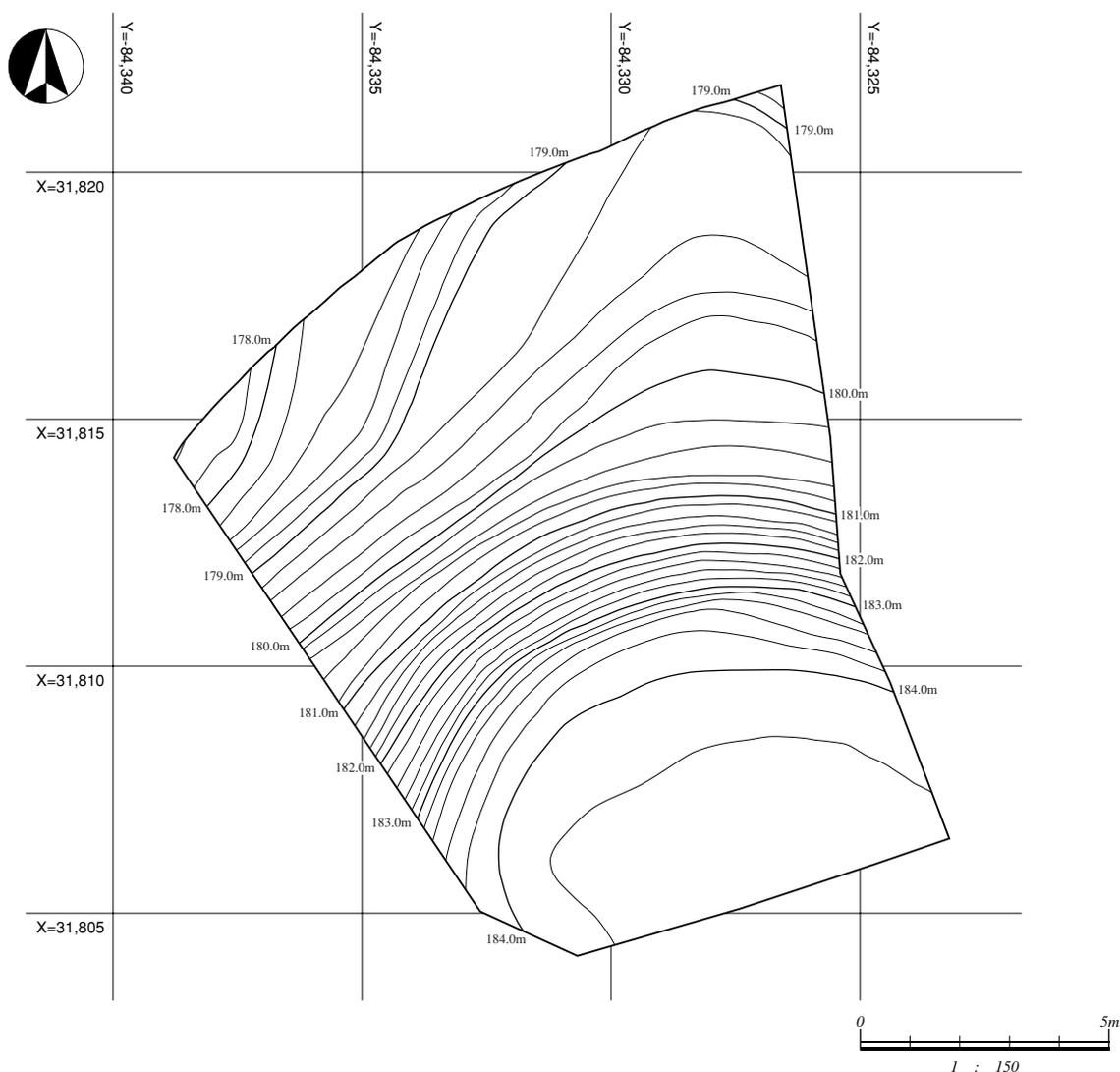


図4 調査前の地形

第2節 基本層序(図5)

層序の確認は、調査区中央部において南北方向に土層観察のためのベルトを設定し行った。

I層は表土層で、腐葉土の堆積層である。

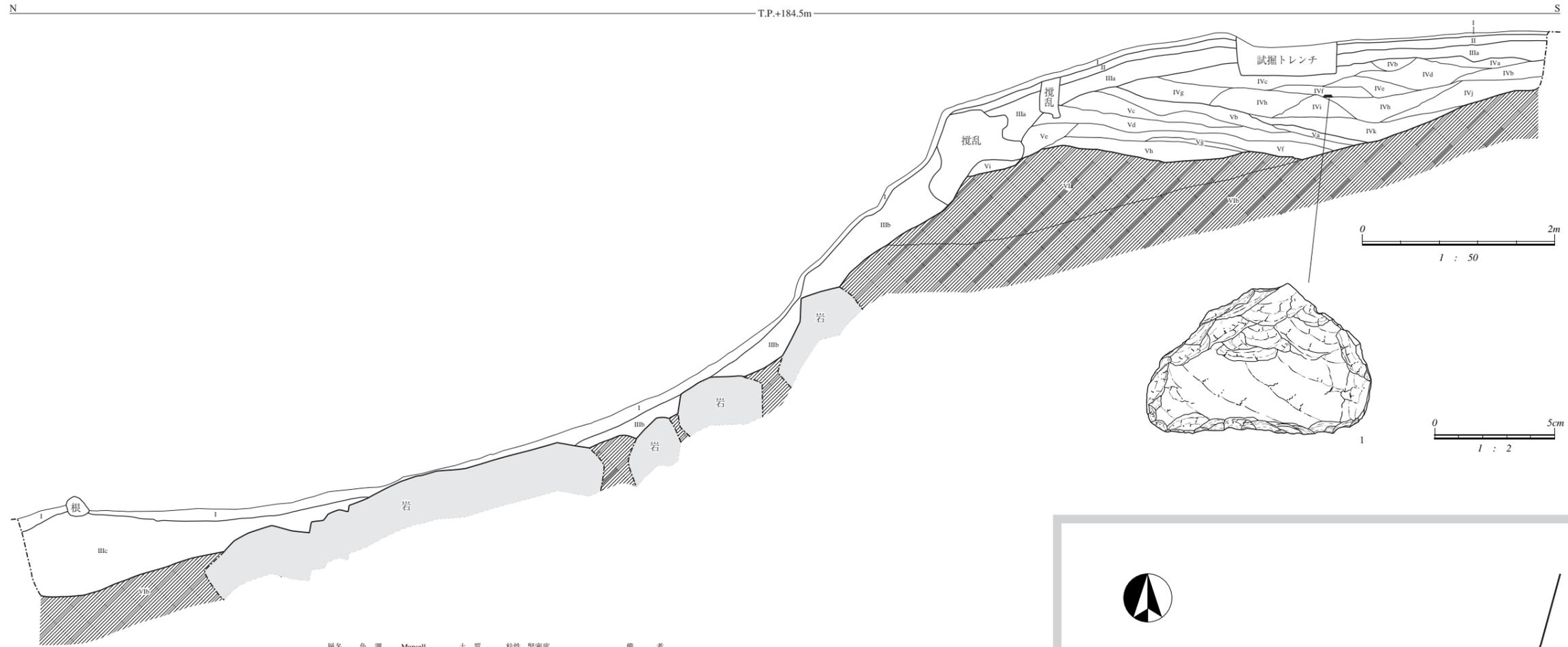
II層はにぶい黄橙色を呈する砂質土層で、調査区斜面上の郭部分において確認できる。

III層は3層(a～c)に細分でき、色調・緊密度に違いはあるが、調査区全体で確認できる自然堆積層である。

IV層は11層(a～k)に細分でき、郭を形成する盛土であると考えられる。後述するV層と比較すると、まとまりのある塊状の土が無造作に堆積して層を成している。

V層は9層(a～i)に細分でき、郭を形成する盛土であると考えられる。厚さ約10～20cmの土層が法肩上がりの傾斜を持ちながらほぼ一様に堆積しており、その傾斜角は約15度を測る。

VI層は2層(a・b)に細分でき、地山を形成している。VIa層は黄褐色を呈する砂質土層であり、ブロック状の砂岩と10～15cm大の角礫を含んでいる。VIb層は砂岩質の岩盤層で、地質区分上は光満層に対比できる。



層名	色調	Munsell	土質	粘性	緊密度	備考
I	黒	2.5Y3/2	褐	なし	粗	腐葉土
II	にぶい黄	10YR6/4	砂質土	なし	密	
IIIa	明黄	10YR7/6	砂質土	なし	粗	
IIIb	黄	2.5Y5/3	砂質土	なし	粗	
IIIc	にぶい黄	10YR5/3	砂質土	なし	密	
IVa	黄	10YR8/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVb	にぶい黄	10YR5/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVc	明黄	10YR6/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に少量含む、郭盛土
IVd	にぶい黄	2.5Y6/4	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVe	黄	10YR7/8	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVf	にぶい黄	2.5Y6/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVg	明黄	2.5Y7/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVh	明黄	2.5Y6/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVi	明黄	2.5Y7/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に少量含む、郭盛土
IVj	明黄	10YR6/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
IVk	黄	10YR5/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Va	灰黄	2.5Y6/2	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vb	灰黄	10YR6/2	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vc	にぶい黄	10YR6/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vd	にぶい黄	2.5Y6/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Ve	黄	2.5Y5/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vf	明黄	10YR6/8	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vg	黄	2.5Y5/3	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vh	黄	10YR7/8	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vi	明黄	2.5Y6/6	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vla	黄	2.5Y5/4	砂質土	なし	密	砂岩をブロック状に含む、郭盛土
Vlb	黄	10YR8/6	なし	極密		10~15cm大の角礫を含む、地山 砂岩岩盤層、地山

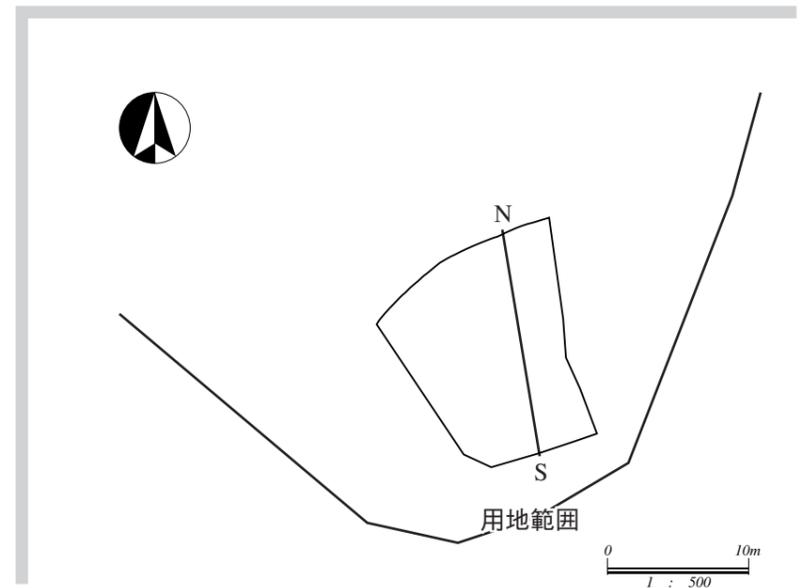


図5 基本層序

第3節 遺構と遺物

1 遺構(図6)

(1) 郭

調査区で確認した郭は第2郭の北端部である(図1)。土層確認の結果、郭は南から北へ緩やかに傾斜する斜面に盛土して成形されている。図5のIV・V層が郭の盛土である。V層はVIa層を覆うように黄褐色と黄色を呈する土を版築状に交互に盛っている。版築状のV層に比べて、IV層は塊状の土が無造作に埋められている。

(2) 切岸

調査区の中央部で検出した。下端にあたる部分では堆積が薄く、表土層を除去するとすぐに岩盤が露出した。地山層を削平して、その傾斜角・比高差を確保したものと見られる。切岸の上端部、言い換えれば郭の縁辺部の盛土は崩落している可能性が高いため、その規模については推定

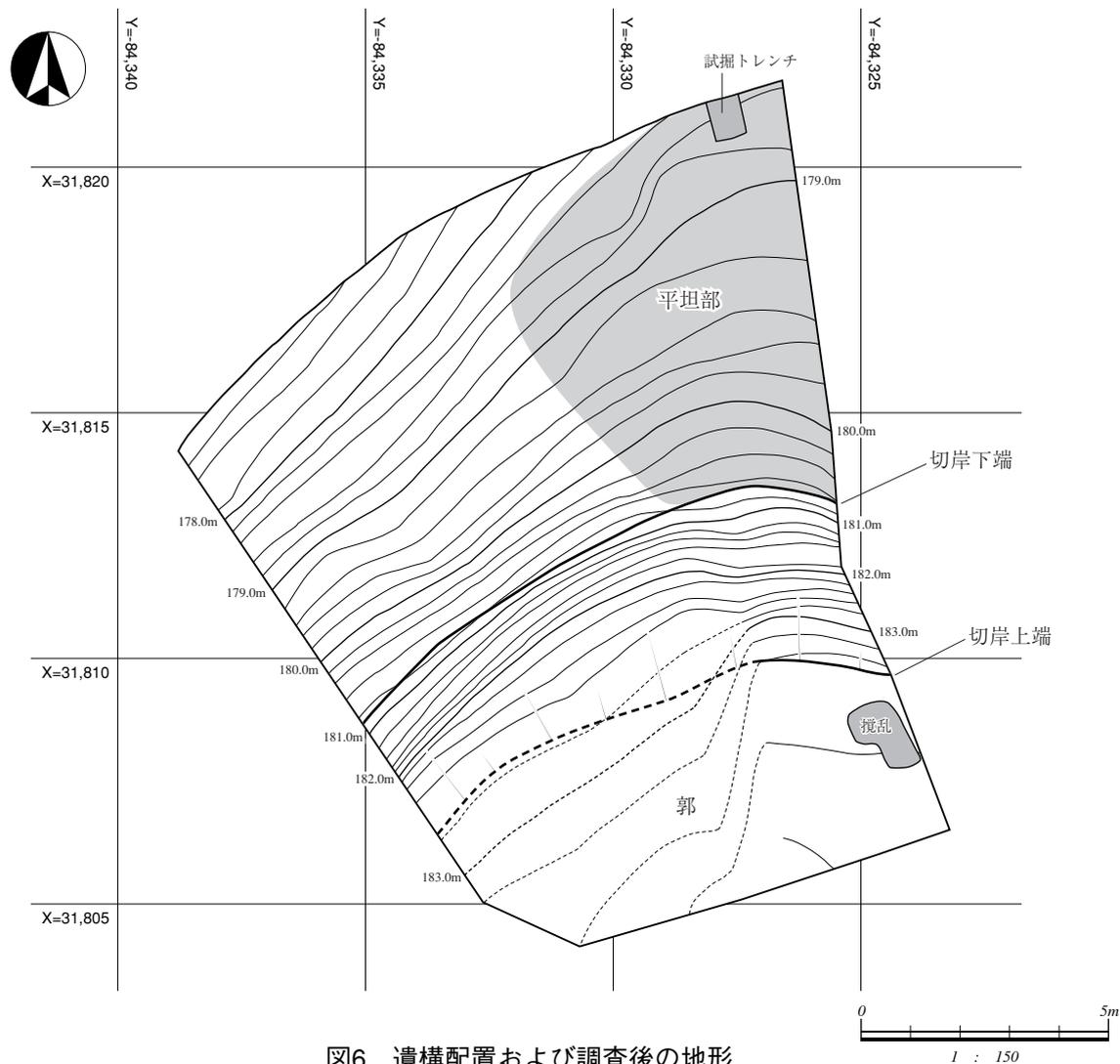


図6 遺構配置および調査後の地形

の域を超えないが、現状より比高差は約2.8m、傾斜角は約45度を測る。

(3) 平坦部

調査区北東部の縦横約5～6mの範囲は、切岸下の斜面の中でも特に傾斜が緩やかである。これは、切岸成形の際に尾根線上の地山層を削平した結果、平坦部として形成されたものと考えられる。ちなみに、この削平については郭の成形を目的として行われた可能性がある。しかし、本調査区は城郭全体のごく一部であり、そこで確認された当範囲を郭としてとらえた場合、平面形およびその機能については不明な点が多い。そこで当範囲の呼称については「平坦部」とすることにした。ただ、直上に存在する郭・切岸とともにこの平坦な地形が利用されたことが想定でき、調査区外の北斜面とともに城域に含まれる可能性が高い。

2 遺物(図7・表2)

(1) IV層出土遺物

1はスクレイパーの完形品である。頁岩製の横長剥片を素材とし、刃部は表裏両面からの調整加工によって作出されたもので、直線的な形態となる。背部などの加工は認められない。刃部の横断面は扁平な六角形状となる。郭盛土中からの出土で、城郭遺構に伴う遺物ではない。

(2) 表面採集遺物

2は備前焼甕の底部である。外面の調整はヨコナデの後に板状工具によるタテ方向のナデ調整が施される。底面は平底である。なお調査区外からの表面採集遺物であり、参考資料として掲載する。

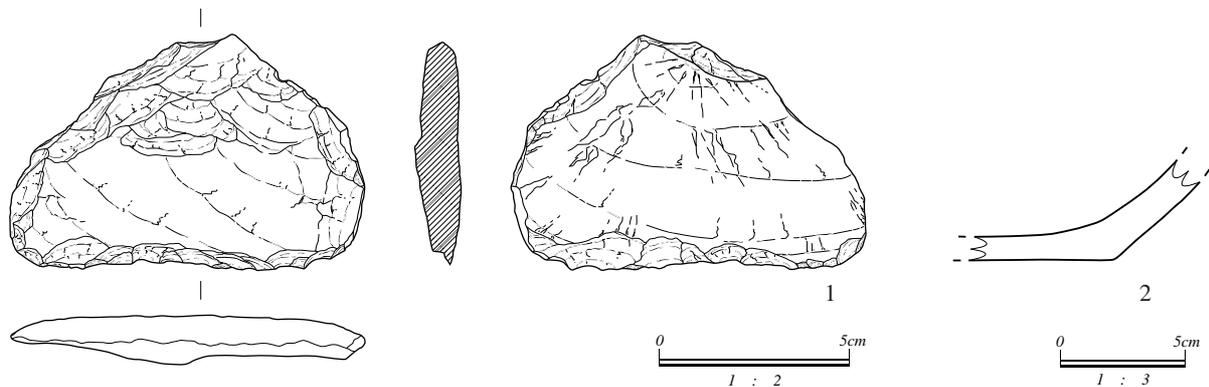


図7 遺物

表2 遺物観察表

遺物番号	出土位置	種別 器種	法量[推定値](残存値) 単位:cm,g	色調	胎土					手法的特徴	備考	図	図版
					石英	長石	雲母	赤色粒	その他				
1	IVf層	石器 スクレイパー	長さ:6.3 幅:9.3 厚さ:1.3 重量:76.16								頁岩製。 完形品。	7	4
2	表面 採集	備前焼 甕 底部	器高:(4.0) 底部径:- 体部最大径:-	o:5YR5/6 明赤褐 i:5YR4/8 赤褐	SM 微	SM 微				o:板状工具による ヨコナデ→タテナデ i:ヨコナデ		7	4

第4章 まとめ

現在、宇和島市三間町において29か所の中世城館跡が確認されている(三間町誌編纂委員会1994)が、今回発掘調査を実施した「角ヶ谷城跡」は、愛媛県や旧三間町による遺跡分布調査報告書(愛媛県教育委員会編1987・三間町遺跡詳細分布調査団1987～1990)、三間町誌にも掲載されていない。地元では「城跡」と呼ばれており、地元研究者の薬師寺孝男氏は、「萩森城から長く延びる大手筋尾根先やや手前に有り、要地を固めて臨むと想定される城である。」と報告している(薬師寺2004)。

調査地は、北側に金山城跡・雨乞城跡、西側に萩森城跡をのぞむ三間盆地南の標高約185mの丘陵に位置し、郭・切岸を確認することができた。遺物は郭盛土中からスクレイパーが出土し、備前焼を表面採集している。

調査面積が丘陵北尾根先の約150m²という限られた範囲で、角ヶ谷城跡全体を解釈するのは困難であるが、土層確認の結果から得られた郭の構築方法について若干のまとめを行いたい(図8)。まず、地山であるVI層を削り成形する。VIa層は地山風化層で、郭縁辺部においては削り残している。次にV層であるが、VIa層を覆うように黄褐色土と黄色土を約10～20cmの厚さで版築状に交互に盛っている。これは縁辺部において版築状に盛ることで切岸の崩落を防ぐためであろう。平面形は確認できていないが、おそらく堤状を呈するものと推測される。最後に堤状盛土の内側を塊状の土で無造作に埋めるように盛土を行い、郭の平坦部を構築したと考えられる。なおIV層とV層の間に土壌化が見られないことから、IV・V層には時間的隔たりはないと判断した。以上、角ヶ谷城跡の第2郭は上記の方法によって構築されたと考えられる。

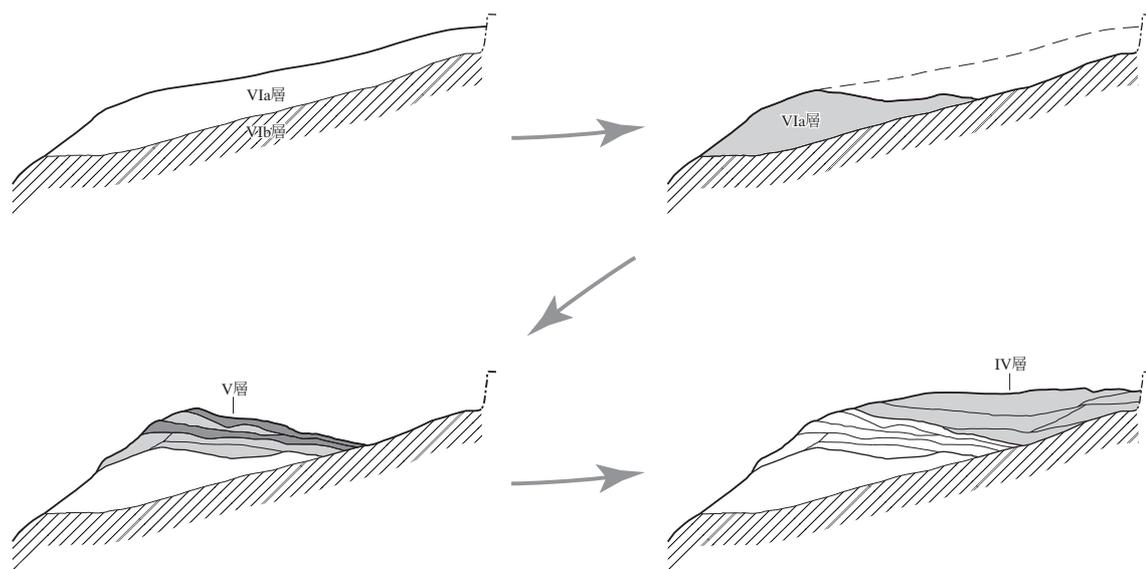


図8 郭構築模式図

第2郭の北端は、平坦部を尾根先端方向へ突出させるように成形しており、三間盆地をのぞむことができる。切岸の崩落を防ぐため施された版築状の盛土は、仮に上部に構造物が建てられた場合、強固な地盤として機能した可能性も考えられる。調査において、この突出部で柱穴などの遺構の検出に至らなかったが、見張り台や櫓のような施設の存在が想定できる。

参考文献

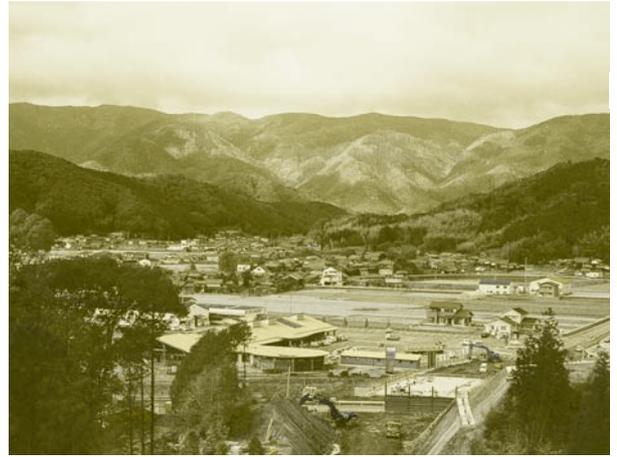
- 愛媛県教育委員会編1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』
三間町遺跡詳細分布調査団1987『三間町成妙地区遺跡詳細分布調査報告書』
三間町遺跡詳細分布調査団1988『三間町三間地区遺跡詳細分布調査報告書』
三間町遺跡詳細分布調査団1990a『三間町二名地区遺跡詳細分布調査報告書』
三間町遺跡詳細分布調査団1990b『三間町詳細分布調査報告書』
三間町誌編纂委員会1994『三間町誌』
薬師寺孝男2004『城の中世 縄張図説・西部四国を中心にして』



版



遺跡遠景(北より)



三間盆地をのぞむ(南より)



萩森城跡をのぞむ(東より)



調査前の調査区 遠景(北より)



調査前の調査区 近景(北東より)



調査前の調査区 近景(南東より)



基本層序1



基本層序2



基本層序3



基本層序4



基本層序5



基本層序6



基本層序7



基本層序8



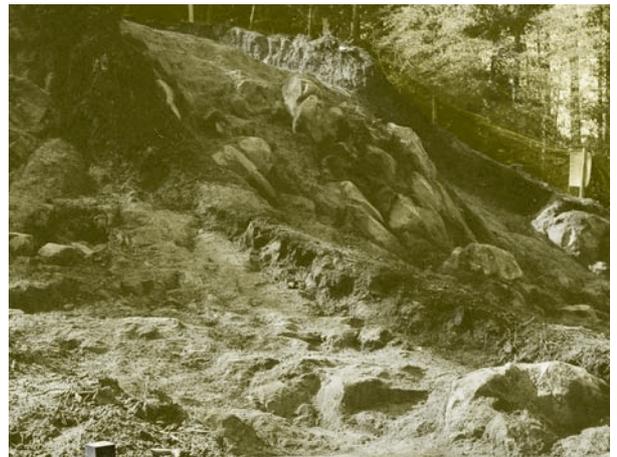
遺物出土状況 近景(西より)



調査区完掘状況 遠景(北より)



調査区完掘状況 遠景(西より)



調査区完掘状況 近景(北東より)



調査区完掘状況 近景(北東より)



調査区完掘状況 近景(南東より)



調査区完掘状況 近景(南西より)



測量風景



1



2

報告書抄録

ふりがな	かくがたにじょうあと							
書名	角ヶ谷城跡							
副書名	県道宇和三間線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第128集							
編著者名	片岡大介 藤本清志							
編集機関	財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒791-8025 愛媛県松山市衣山四丁目68番地1 TEL (089) 911-0502							
発行年月日	西暦 2006年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かくがたにじょうあと 角ヶ谷城跡	えひめけんうわじまし 愛媛県宇和島市 みまちょうむでん 三間町務田866番2	38203		33°16'49"	132°35'50"	20060206 \n20060220	150	県道宇和三間線整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
角ヶ谷城跡	城館跡	中世	郭 切岸	石器 備前焼				

埋蔵文化財発掘調査報告書 第128集

角ヶ谷城跡
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成18年3月

編集・発行 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
愛媛県松山市衣山四丁目68番地1
TEL (089) 911-0502

印刷 岡田印刷株式会社

